

学位請求論文の内容の要旨

論文提出者氏名	総合医療・健康科学領域 精神・発達医療学教育研究分野 氏名 鈴木 裕幸
<p>(論文題目)</p> <p>The association of social capital with depression and quality of life in school-aged children (小中学生におけるソーシャルキャピタルと抑うつ、および生活の質の関連)</p>	
<p>(内容の要旨)</p> <p>【背景】 WHOによると、青少年の10～20%が精神障害や精神衛生上の問題を経験し、その半数は14歳までに発症していると言われている。子どものメンタルヘルスの問題は、生活の質(Quality of life: QoL)を低下させ、問題行動を悪化させ、学校への出席率を低下させる。日本では近年、不登校が増加し、2020年には若者(19歳以下)の自殺が過去最高となった。抑うつは、不登校や自殺のリスク要因であると数多く報告されており、子どものメンタルヘルス問題に対する予防策を講じることは必要不可欠である。子どものメンタルヘルスの問題とは、コーピングなどの個人的な要因だけでなく、学校や家族、友人関係などの社会的要因が関連することが明らかになっている。</p> <p>ソーシャルキャピタルは、上述した社会的要因を包含する概念で、1) 社会集団のメンバーが利用できる資源(信頼、規範、制裁の行使など)である集団の属性、2) 個人の社会的ネットワーク内に埋め込まれた資源(社会的支援、情報チャネル、社会的信用など)である集団の特性、として定義されている。また、ソーシャルキャピタルは、個人が利用できる資源だけでなく、社会的関係の構造に内在するものでもあり(すなわち、ソーシャルキャピタルは生態学的システムであると考えられている)、個人レベルと集団レベルのソーシャルキャピタルが個人の健康と関連することが報告されている。</p> <p>児童青年期のメンタルヘルスとソーシャルキャピタルに関する研究は近年増えてきているが、いくつかの問題点が指摘されている。1つ目は、成人を対象とした研究ではソーシャルキャピタルのうち、構造的ソーシャルキャピタルよりも認知的ソーシャルキャピタルの方がメンタルヘルスと関連することが明らかになっているが、子ども自身が認知したソーシャルキャピタルを指標にした研究が少ないことである。2つ目は、子どもが多く過ごす学校に関するソーシャルキャピタルが考慮されていないこと、3つ目は妥当性が検証された尺度を用いていないことである。</p> <p>本研究の目的は、上述した問題点を解決すべく、学校ソーシャルキャピタルを考慮した児童青年期の認知的ソーシャルキャピタルの尺度(SCQ-AS)を使用して、小中学生における個人レベルおよび学校レベルのソーシャルキャピタルと抑うつ、QoLの関連を明らかにすることである。また、それらの関連が小学生と中学生でどのような違いがあるかを検証することである。</p> <p>【方法】 本研究は、弘前市の公立小中学校で実施され、対象は小学生3,722人、中学生3,987人(9歳から15歳)であった。調査時期は2018年9月であった。抑うつおよびQoLの測定には、国際的に用いられている尺度を用いた(抑うつ: DSRS-C、QoL: PedsQL)。ソーシャルキャピタルの測定にはSCQ-AS日本版を用いた。統計解析では、個人レベルと学校レベルの効果をそれぞれ独立して検証することができるマルチレベル混合効果モデル分析を用いた。</p>	

【結果】統計解析の結果、ソーシャルキャピタル（SCQ-AS）の3つの下位尺度すべて（学校、安全感、地域）が、個人レベルで抑うつおよびQoLと関連していることが明らかとなった。個人レベルでは、ソーシャルキャピタルの指標の中でも「学校」の要因の関連が最も強いことが示された。また、学校レベルでは、抑うつにおいて、「学校」および「安全感」の要因で有意な関連が認められ、QoLでは「安全感」の要因のみ有意な関連が認められた。

さらには、小学校と中学校におけるソーシャルキャピタルと抑うつ、QoLの関連を調べたところ、学校ソーシャルキャピタルと抑うつの関連は中学生の方が強く、学校・近隣ソーシャルキャピタルとQoLの関連は小学生の方が強かった。続いて、学校レベルの「安全感」と抑うつの関連は中学生よりも小学生の方が強いことが明らかになった。

【考察】本研究結果から、ソーシャルキャピタルが高い児童生徒は、抑うつが少なく、QoLが高い傾向にあることがわかった。この結果は、ソーシャルキャピタルと抑うつ、QoLの関連を調査した先行研究と一致している。本研究で観察された学校ソーシャルキャピタルが近隣ソーシャルキャピタルよりも抑うつやQoLに強く関連している結果は、先行研究で指摘されているように、子どものソーシャルキャピタルの構成要素として学校ソーシャルキャピタルが重要であることを裏付けた。また、学校レベルの「学校」および「安全感」と抑うつ、「安全感」とQoLとの関連についても先行研究を支持した結果であった。

本研究は、ソーシャルキャピタルと抑うつおよびQoLの関係は、小学生と中学生で異なることが明らかにした最初の報告である。個人レベルの学校ソーシャルキャピタルは抑うつでは中学生が、QoLでは小学生の方が、関連が強く見られた。この結果により、小学生と中学生では抑うつの現れ方が違いに要因があると推察されたが、今後の検証が必要である。

学校レベルの「安全感」と抑うつの関連は中学生よりも小学生の方が強いという結果は、小学生は中学生よりも社会環境の影響をより受けやすいためだと考えられ、小学生は学校全体の安全感をより考慮した方が良いことを示唆している。

【結論】本研究結果は、個人および学校レベルで高いソーシャルキャピタルを持っていると、子どもたちのメンタルヘルス（この研究では、抑うつ、QoL）が良いことを示した。さらには、ソーシャルキャピタルとメンタルヘルスの関係は、小学生と中学生で異なっていることを明らかにした。これらのことから、小中学生のメンタルヘルスの問題において、子どもたちの一人一人が認識しているソーシャルキャピタルに加え、子どもたちが通う学校のソーシャルキャピタルを考慮すること重要であることを示唆した。